

抄 録

岡山醫科大學歐文業府第7卷第2號邦文抄録

日本並に米國流行性腦罹患二十日鼠に
 發見されたる核包含體に就て
 (「ウイルス性」核包含體の研究 II)

病理學教室 濱崎 幸雄

日本並に米國流行性腦炎 Virus に特異なる核包含體は未だ認められて居ない。著者は最近著者の系統的組織化學的核物質檢出法を應用して之に特有なる核包含體を檢出し得た。之が流行性腦炎に特異なりとなす理由は、其の檢出率は 100% の理想的成績を示し、各種の對照試験に於ては全く陰性に終り、又各種の核物質檢出法も亦總て陰性であり、其の分布は甚だ特異性を示し脈絡膜叢上皮、Glia 細胞殊に Bergmann 氏細胞及び嗅腺々細胞を選擇的に侵し、反之神經節細胞中に之を形成せざること等である。殊に Virus 性腦炎に現はれる包含體にして神經節細胞中出现せざるものは未だ曾て文獻中に其の記載を見ないのである。尙ほ 3 種の Glia 細胞中 Oligodendroglia を最も好み Makroglia 中には少数に、Hortega 氏 Glia 中には甚だ稀に認められる、故に腦内に於ける本包含體の分布は大體 Oligodendroglia の粗密と一致する、従つて從來流行性腦炎に特異なりとされて居る病變の好發部と必ずしも一致しないことは注意すべきである。又 Glia 病竈内に於ては Glia 核の變性と併行して包含體は退行性變性を起し先づ嗜酸性を減じ次で崩壊消失する。従つて病竈中心部には核包含體少く病竈周邊部に之を認めることが多い。尙ほ美麗な包含體が現れるのは炎症の比較的弱い、Glia の瀰漫性に増殖した部分である。之等は本包含體が Virus 性病變と關係少きが如き誤認を被る恐れなしとしない所見である。

藥物注射時の皮下結締織細胞の變化

III. 「スチミン」と「ツクレイン」
 及び「モクソール」と「ツベル
 クリン」の併用

解剖學教室 三井 義亮

余は第 1 報及び第 2 報に於て、「スチミン」、「モクソール」、「ツクレイン」及び「ツベルクリン」の皮下注射が二十日鼠の皮下鬆疎結締組織に及ぼす影響に就て發表せり。今回は之等藥品を組合せて注射し次の如き結果を得たり。1. 「スチミン」と「ツクレイン」を同時又は 24 時間の間隔を以て注射する場合は、單に「ツクレイン」のみを注射する場合に比して炎症輕度にして、且速に恢復す。組織球の増殖はしかし後者より強し。2. 「モクソール」と「ツベルクリン」を同時又は 24 時間の間隔を以て注射する場合は、單に「ツベルクリン」のみの皮下注射に比し、炎症はより輕度なるが、組織球の増殖は、より強度なり。3. 「スチミン」と「モクソール」の炎症抑制作用は、多數に現れたる組織球が「ワクタン」の毒性に拮抗するによると考へらる。其の組織球の大部分は纖維細胞より生じたるものなり。

藥物注射時の皮下結締織細胞の變化

IV. 「ズルフオンアミド」製劑の
 注射

解剖學教室 三井 義亮

「ドマグク」によつて「ブロンズル」が発見せられて以來、「ズア」劑は各方面から詳しく研究されてゐるが、著者は「アラポール」と「アクタゾール」を二十日鼠の皮下に注射して、之が皮下鬆疎結締

織細胞に及ぼす影響を研索し、次の如き結論を得た。皮下に注射した「ズア」剤の刺戟は、一般に「ワクテン」類の夫れより遙に弱いが、皮下鬆球結締織に多量の組織球の増殖を生じ、而も注射部位のみならず反対側等全身に之を認めた。之等の組織球は大部分該部の纖維細胞より発生したものである。斯の如く増殖した組織球の意義が問題である。ドマグクは「プロンドジル」の優秀な効果はそれが非特異的に小網内皮系統に賦活するによるものではないと考へたが、鋭上の如く増殖せる組織球の治癒に關與する可能性を除外することは出来ぬであらう。

家兎の股動脈結紮後の下腿の皮下結締細胞の變化

解剖學教室 木村規矩志

手術の1日、3日、6日後に下腿の後側の皮下鬆球組織の小片をとり、載物硝子の上に軽く擴げ、「アイゼンヘマテインラック」法で染色した。結紮1日後の下腿は外見上少しく青藍色を呈し、軽度の腫脹を認む。この時期の皮下結締組織の細胞像の最も著明なる變化は纖維細胞より多數の單核球樣細胞と組織球が増加したことをである。纖維細胞と纖維組織球性細胞の原形質内に多數の空胞を見る。3日後に於ては下腿の腫脹は消退するも、尙ほ僅に充血する。側副血行枝の完成に伴ひ、上記の増加細胞の大部分は纖維組織球性細胞に復り、組織球が僅に存在し、單核球樣細胞に至りては、ただ稀に認められるのみである。6日後には組織細胞像は大體舊に復する。白血球は始終殆ど認められなかつた。

炎症滲出液の非細胞性成分の等電點の變化に就て (第2報)

解剖學教室 清光博愛

生きた葡萄球菌の「エムルジョン」を作り、其の一定量を海鼠の側腹部皮内に注射して、初め強

烈なれども次に速に治癒に赴く炎症を人工的に起し、其の膿瘍内に於ける滲出液の非細胞性物質の等電點が如何に變化するかを検索した。「エムルジョン」注射1日後に於ては局所に小なる腫脹を認め、4—8日後には帽針頭大の硬結となつた。其の切片を顯微鏡下に検査すると、固定せられた非細胞性物質として始めは顆粒狀、網狀のものが少量に認められるに過ぎなかつたが、4日後には稍々多量に、8日後には非常に多量に「フィブリン様」物質の析出を見た。連續切片を染色して測定した等電 pH 値は始め1日後には5.5の稍々高き値を示し、其の後少しく上昇して行き、最後に8日後に最高5.9を示すに至つた。

化學療法劑靜注と線組系

I. 「サルヴルサン」による實驗

解剖學教室 荒田一郎

結合組織にある線維細胞、線組球、組織球等——吾々は之を一括して線組系と呼ぶ——が化學療法に際し如何なる働きを有するかに就ては未だ文獻を見ず、「マウス」に「サルヴルサン」を靜注し線組系の變化を觀察するに、注射後24時間にして變化最高調に達し正常の線維細胞網は殆ど認められず、細胞は大部分線組球と組織球に變化せるを認む。時間の経過に従ひ原狀に復し、注射後8日頃には全く正常の線維細胞網の狀態となる。更にこの「サルヴルサン」により刺戟賦活せられたる線組系の色素攝取能力を見るに、腹腔内に注射せられたる「トリパンブルー」は刺戟最高調なる「サルヴルサン」注射後24時間に於て最も強度に攝取蓄積せらるるを見る。即ち「サルヴルサン」靜注は皮下結合組織中に線組球と組織球の著明なる増加を來すものなり。

急性炎症による家兎の鼻腔上皮の等電點の變化

解剖學教室 田村章

加熱殺菌したる2%葡萄球菌浮游液0.1ccmを家兎の鼻粘膜の處々に注射し、注射後1日、2日、4日、8日、16日後に鼻粘膜を取りて95%「アルコール」にて固定、10 μ の「パラフィン切片」を作り、「ボンソー」と「トルイヂンブラウ」の溶液(pH 2.6—7.0)にて染色、上皮細胞の原形質の等電點を測定せり。炎症に際し等電pH値は正常なるもの(呼吸部4.90、嗅部5.15)に比して低く、炎症第2日に最低となる(呼吸部4.65、嗅部4.75)。其の後日の経過に従ひ漸次正常値に近づく。炎症に際し細胞、滲出液等に炭酸、乳酸等の小分子の酸性物質の出來る事は既に知られたる所なるが、かかる酸性物質は組織學的操作の間に容易に消失するものなり。故に等電pH値の低くなるは、「アルコール」に固定せらるべき大分子の酸性産出物の集積する爲と解すべし。

胸壁の非特異性肉芽性炎症の稀有なる1例

三宅外科 黒田 孝重

余は最近16歳の少女の右大胸筋終止部に疼痛及び腫瘍を主訴として當科を訪れたるを臨牀的診斷名は肉腫となし、之を手術的に除去し幸にも32日にして全治退院せり。之を組織學的に檢索したるに肉芽性炎症が病竈の主なるものにして「プラズマ」細胞の浸潤或は動脈周圍炎等は缺如し、結核の場合に存する血管の新生は中心部にある肉芽に於てのみ觀察せられたる點より稀有なる大胸筋の非特異性肉芽性炎症なるを識つた。併せて臨牀的並に病理解剖學的所見を記載し、考案を試みた。

染色法による血液「フィブリン」の等電點の測定

解剖學教室 清光 博愛

等電點の測定には種々の方法がある。組織切片に於ける細胞や細胞成分の様な非常に小さな物體

の等電點測定には染色の法が最も適當してゐる。著者はこの方法を以て組織の種々非細胞成分の等電點を測定して來たのであるが、本研究に於ては同原理の方法を試験管内のメルク製の化學的に純粹な「フィブリン」に就て試みた。即ちそれを試験管内にて諸種水素「イオン」濃度に於て「ボンソー」と「トルイヂンブラウ」溶液で染色し、其の液の殘存色素の濃度より等電點を測定した。其の結果等電pH値5.9を得た。この値は炎症時に得た「フィブリン様」物質や動物血より析出した「フィブリン」の等電pH値(5.9—6.0)と一致することを認めた。もし「フィブリン」を「フォルマリン」にて處理すると、4日間の處理により5.2迄も等電pH値は低下することを見た。

モロー氏「ツベルクリン軟膏」塗擦による皮下結締織細胞の變化に就て

解剖學教室 三井 義亮

前報に於て、二十日鼠に就て「ツベルクリン」皮下注射による皮下結締織細胞の「ノルメルギー性」反應に關して記載し、「モクソール」等が之を抑制する作用のあることを報告したるに續き、更に今回「ツベルクリン」にて感作したる二十日鼠にモロー氏「ツベルクリン軟膏」を塗擦して其の皮下結締織の「アレルギー性」反應を檢索し、之を單にモロー氏軟膏のみを塗擦したる場合と比較研究し、次の結果に到達したり。即ち豫め「ツベルクリン」にて感作したる二十日鼠にては對照の場合に比し、より早期に、より強度に全身皮下結締織に白血球の増殖を見、夫れ等の白血球は大部分環狀の核を有し、該部の纖維細胞より發生す。對照の場合は軟膏塗擦によつて發生する白血球は前者より遙に少く、これに反し單核球はより多く發生す。而してこれも其の部の纖維細胞より發生する事が認められたり。

化学療法剤静注による織組系の賦活

II. 水銀剤による試験

解剖学教室 荒田 一郎

水銀剤として「ノブズロール」、「イグロシン」、「ルニヒノン」、「ネルケガン」を使用し、体重 20 g につき 0.05 ccm づつ「マウス」の尾静脈に注射し、5, 12, 24 時間, 2, 4, 8 日の間隔をおき、皮下結締織を採り、「鐵へマテインラック」法により染色検査し次の結果を得たり。織組系は水銀剤静注により刺戟賦活せられ、纖維球は織組球を経て組織球にまで轉化し、注射後第 4 日に於ても尙ほ強度の組織球増加を見、第 8 日に至り始めて細胞像は正常状態に復歸す。

化学療法剤静注による織組系の賦活

III. 「アクリヂン色素」による試験

解剖学教室 荒田 一郎

「アクリヂン色素」として「トリパフラビン」、「イスラビン」、「リヴノール」を使用し、体重 20 g につき ¼% 溶液を 0.05 ccm づつ「マウス」の尾静脈に注射し、5, 12, 24 時間, 2, 4, 8 日の間隔をおき、皮下結締織を採り、「鐵へマテインラック」法により染色検査し、次の結果を得たり。1. 注射後 12 時間にして織組系は刺戟状態を起し、24 時間にして組織球の産出が盛になり、48 時間にして最高調に達し、次に正常の状態に復歸の態勢を取るも、第 8 日に於ても尙ほ結締織は軽度ながら刺戟状態を呈す。2. 織組系の賦活は色素の尿中排出最高度の頃に始まり、強度の組織球産出は尿の黄染褪色後に始めて認めらる。3. 局所的刺戟の際の如き白血球と單核球の異常出現は見られず。